

これならわかる💡経済の仕組み 第5回

2013年3月28日

全2頁

経済における「価値」

常務執行役員
岡野 進

前回、財・サービスの価格が市場で需要と供給を通じてどう決まっていくのかということについてお話しました。一方、モノにはあまり変動しない価値というものが内在しているのではないか、という議論もあります。近代の経済学の祖とされるアダム・スミスは生産物の価値の本質は労働と考えていました。その後、マルクスの剰余価値説なども生まれました。現在では、価値を労働だけに求める議論に対し、経済資源のもつ希少性に注目する考え方が主流になっていますが、決着がついたとまではいえません。ここではこれらの考え方を紹介したいと思います。

アダム・スミスは1723年にスコットランドに生まれ、経済や神学・哲学を研究しました。『諸国民の富の性質と原因の研究』（『国富論』）（“An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations”）という著書を1776年に出版し、経済学といえるものをはじめて総合的な形で世に問うた、といえます。アダム・スミスは富の概念を従来の重商主義的な「貿易による財貨の獲得」から「労働の生産力の増大」へと切り替えました。そして「労働こそは、すべての物にたいして支払われた最初の代価、本来の購買代金であった。世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである」（アダム・スミス『国富論』大河内一男監訳、中央公論社、1978年）と、労働価値説を主張しました。アダム・スミスは経済学の父といわれ、古典派経済学の創始者と位置づけられています。



アダム・スミスの確立した古典派経済学を受け継いだのはリカード（1772年生まれ）です。リカードは自由貿易を主張し、それを比較生産費説で裏付けました。価値に関しては、リカードは投下労働価値説＝生産物の価値はそれを生産するのに必要な労働の量で決まるという説をとりました。道具や機械、原材料などに間接的に投下された労働量と生産に直接投下された労働量の合計によって商品の価値が決まる、という考えです。

ドイツ出身の社会主義者マルクス（1818 年生まれ）はリカードの投下労働価値説を受け継いだ上で、労働と労働力を区別し、したがってそれぞれの価値を区別しました。前者は生産過程で生産の要素となる労働であり、それが付け加える価値、後者は労働する能力を再生産するための費用（平たくいえば労働者の生活費）であり、これが賃金になると考えました。このように両者を区別することで利潤の源泉が両者の差＝剰余価値であると主張し、自らの説を剰余価値説と呼びました。マルクスはさらに生産価格という考えを導入しました。これは、より高い利潤率を求めて資本の移動が起きるため、それに影響を受けて商品の価格が平均的な利潤率になるような価格に収斂していくという説です。こうなると、労働価値説は経済全体の付加価値には当てはまっても個々の商品の価格はもっと複雑な過程で決まってくるということになります。

こうした労働価値説を受け継いだ流れに対して、ワルラス（1834 年生まれ）やジェボンズ（1835 年生まれ）などによって 1870 年代に成立した新古典派と呼ばれる経済学派は、労働価値説は「労働力を生産過程における唯一の希少な資源」と仮定する特殊なモデルでしかなく、経済学の普遍的なモデルにはならないとの見解を示しました。彼らは効用の大きさが価値を決めるという立場に立っていました。ここで、効用とは、人が財（商品や有料のサービス）を消費することで得られる満足の水準を表します。

この後も経済理論において価値や価格に対する論議は数多く行われています。スラッフア（1898 年生まれ）は主著『商品による商品の生産』（“The Production of Commodities by Means of Commodities”）などによってリカードの労働価値説に厳密な解釈を与え、新古典派の立場を批判しました。



価値をめぐるのは経済学者の間でこのように見解の違い、論争があり、完全に決着がついたとはいえないでしょう。価値をめぐる考え方には哲学的な部分も大きい要素を占めていると思われます。

（以上）